

## 哲学から見た宗教

アンドレーア・レオナルディ

### はじめに

みなさん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきましたアンドレーア・レオナルディです。本題に入る前に、お詫びしたいことが一つあります。配る資料を何も準備していないことです。なぜ何も準備してないかというと、本当の理由は、私は準備することが苦手ですから。どうしても必要な時には準備しますけれども、必要がなければ、自由に話す方が面白くて、楽しいと思います。しかし、もっと深い理由もあると思います。プラトンという哲学者がいました。名前ぐらいは皆さん聞いたことがあると思

ます。紀元前四世紀くらいの古代ギリシヤに生きた偉い哲学者です。彼は多くの書物を執筆しましたがけれども、その書物の中に自分の思想の一番重要な意義、一番深い内容をあまり書きませんでした。そういった深い内容を、やり取りの中で直接に弟子に教えました。弟子の質問や反論、意見を聞いて、それに応じて教えていった訳です。

その理由はプラトン自身が一通の書簡の中に書き残しています。簡単に言えば、プラトンによると、一度自分の考えていることを書いてしまえば、書いたことが固定したものになって、もう生きていない、死んだものになる。書いた内容はそのまま終わる。それに対して、直接に人に話す時はアイデアが動いています。アイデアが生きています。こうしてその時に、新しいひらめき、新しい発想が湧いてきて、あるいは古い発想でも新しい形で現れてくるのです。私も今日は、プラトンほど偉い人ではない、というより全然偉い人ではないのですけれども、できればプラトンのように少し生きている話、生き生きとした講義をしたいと思えます。だから資料を何も準備してきませんでした。

学長先生が私の日本語を褒めてくださって、達者だとおっしゃいましたけれども、

哲学から見た宗教

実際にはまだ不自由なところが多く、準備してないため下手な日本語が出てしまうと思います。どうかご勘弁ください。

さて、タイトルから始めたいと思います。「哲学から見た宗教」。このようなタイトルは少し堅苦しく聞こえるかもしれませんが。まず、哲学とは何でしょうか。学生さんの中でよく分からない方がおられると思います。日本では哲学を専攻しないと、哲学を勉強するチャンスはないからです。一方、哲学の一部で「宗教哲学」という専門分野があるので、逆に哲学のことをご存じの方は、「今日は従来の宗教哲学の説についての話を聞きましょう」という印象を受けられるかもしれません。しかし、そうではありません。私が今日お話ししたいことは、偉い哲学者の宗教哲学の説ではなくて、むしろ自分の考えてきたこと、つまり、哲学を専門にし、宗教に関心を持っている一人の人間として私が考えてきたことについて皆さんにお話ししたいと思うのです。先ほど、こちらの先生から学生さんは「今日の講座で学んだこと」についてのレポートを書く聞いて、私は少し心配になってきました。あまり立派な話ではないのにレポートの内容として…どうなるでしょうかと思いました。一応、頑張って話してみたいと

思います。

## 宗教とは

まず、哲学のことをしばらく置いておいて、「宗教」のことを考えてみたいと思います。宗教と言われると、皆さんは二つのことが思い浮かぶかもしれません。一つはいわゆる既成宗教、つまり、既に存在している、昔から伝わってきた宗教だと思えます。キリスト教、その中でカトリック、プロテスタント、ギリシャ正教など、あるいは仏教、仏教のいろいろな宗派、そしてイスラム教、ユダヤ教……。これらの既成宗教は昔から組織化されて、その教義が教えられている経典があつて、団体やお寺、教会、モスクのような聖なる所、崇拜する所などがあります。しかも、釈尊、イエスキリスト、ムハンマドといった創立者がいる訳ですね。大体、大ざっぱでも既成宗教はどんなものか皆さんお分かりかと思えます。ところが、宗教にはもう一つの意味があります。それは、宗教というものは、自分の人生に深く関わる問題に取り組むものだ

哲学から見た宗教

ということです。「我々はどこから来たのか、何者であるのか、どこへ行くのか」、画家ゴーギャンの作品のタイトルとして有名な問いかけがありますね。それはつまり、私たちの命はどこから出てきて、私たちの人生の目的は何だろうという根本的な問いかけなのです。私たちの人生はわずかな期間に限られていて、いつか死んでしまいます。すると、死んだら私たちはどうなるのでしょうか。私たちがこの世の中に生きていることはどんな意味、どんな目的を持っているのでしょうか。しかも、私たち自身が死ぬだけではなくて、私たちの愛している人たちも必ず死んでしまいます。私たちが大事にしているものは何でもいつかは消滅してしまいます。私たちは何もかも失うという運命にあります。自分さえ失う。自分の命さえ失う。そこから自分の人生の意味への問いが生じて、その答えを探る一つの試みとして宗教という営みが生まれるのです。こうした宗教の意味はたぶん皆さんがご自分の中で分かっておられると思います。ほんやりした理解かもしれませんが、一応「宗教」と聞くときに、既成宗教というイメージだけではなくて、自分にとっても近い宗教のイメージも思い浮かんでくると思います。私が今日話してみたいことは、こうした宗教の意味についてなのです。

人間には宗教的な欲求があります。人間は大昔から宗教という営みをしてきました。いつからなのかはだれも正確に知りませんが、皆さん、ネアンデルタール人というをご存じですね。大昔、いわば私たちの進化論上の従兄弟で、ネアンデルタール人というもう一つの人類が存在していました。大体、四十万年前から六十万年前に現れて、ヨーロッパ、北アフリカ、中央アジアに普及して、三万年くらい前に絶滅したと思われます。そのネアンデルタール人は既に宗教的な儀式を行っていたようです。なぜなら、彼らの墓の中に土葬の時に儀式が行われた痕跡があるからです。いろいろな花や飾り物、道具が置かれていて、遺体はしゃがんでいる形に安置されています。すなわち、死んだネアンデルタール人はただ要らない亡骸なきがらとして捨てられたのではなく、丁寧に土葬された訳です。貴重品を持ちながら、あたかも母なる大地の中に赤ちゃんのように眠る…。その意味はあくまでも推測にすぎませんが、他の動物にまったく見られない、こうした大昔の墓の遺跡があります。したがって、人間が大昔から来世にかかわる宗教のような営みをしていたと考えられます。たぶん、人類が現れてから、人間の中に宗教的欲求がずっとあったと言えるでしょう。ちなみに、

## 哲学から見た宗教

「宗教的欲求」とは私の言葉ではなくて、西田幾多郎という偉大な日本の哲学者の用語です。京都には「哲学の道」がありますね、銀閣寺と南禅寺の間に。昔、京大の最初の哲学教授を勤めていた西田幾多郎が近くに住んでいて、その道でよく散歩をしていたということから、「哲学の道」と名づけられたそうです。宗教的欲求というのはその「哲学の道」の西田幾多郎の言葉なのです。

私たちは自分の人生の意味、生きていることの意味を求めています。自分に問いかけています。そしてその答えを、宗教のようなものに求めます。その宗教的欲求というのはどのようなものでしょうか。どこから来ているのでしょうか。そしてどのような真理価値を持っているのでしょうか。真理価値というと、つまりそれは、私たちの人生の中で、実在の中でどのような真実を表しているのかということなのです。私たちは宗教的なことを考える時に、ただ空想の中にいるだけなのか、神様や仏様は私たちの頭の中にしか存在しない架空の人物にすぎないのか、あるいはこの宇宙には本当に神様や仏様のような存在があるのか。こうした宗教的要求にまつわる問題について哲学の立場から少し考えてみたいと思います。

## 哲学とは何か

哲学の立場からと言いますが、哲学とは何かを説明するのはとても難しいです。普段「何々学」と言ったら、その「何々」を研究している学問、例えば物理学なら物理、物質やその法則、あるいは社会学なら社会を研究している学問だと考えられますね。ところが、哲学は「哲」を研究していると言われても、あまり意味が分からないでしょうね。しかも、哲学者の間でも哲学の意味について意見が大きく分かれています。ここでは哲学の意味に取り組むことはできないのですが、一応、哲学には一つの大きな特徴があると思います。哲学とは、何をテーマにしてもなるべく先入観なしに考えようとする学問、言い換えれば、何も前提にせずに考えようとする学問です。先入観という時に、日常的で悪い意味での先入観ではなく、哲学の専門用語になっていく「先入観」を考えています。こうした先入観とは、私たちが物事に直面する前に、その物事について既に持っているつもり知識です。私たちはいつもこうした先入観

哲学から見た宗教

の中で生きて行動しています。例えば、皆さんはこちらに來られる前に、「今日は宗教に関する講座があつて、発表者は欧米人なのでたぶんキリスト教徒だろう」ということを前提にしておられたかもしれません。「あ、イタリア人。サッカーの好きな人だろう」という先入観もあつたかもしれません。あるいは、「発表者は顔立ちが日本人と違うだろう。」こうして、間違っている先入観もあります。私はサッカーに全然興味がありません。しかし、正しい先入観もあります。皆さんは入つてから、私を見て顔立ちから「あ、あのんだ」とすぐ分かつたでしょうね。要するに、私たちはこうした先入観をもって世界を認識している訳です。もちろん哲学者もそういう先入観を持っているのですが、哲学者はなるべく先入観を置いておいて、いわば先入観をカッコに入れて考えてみたいという人です。生のままの現実、新鮮なままの現実に向き合つて、物事を理解してみたいという人です。言うまでもなく、先入観を完全に置いておくことは無理です。先入観は、自分の過去、自分の経験、自分の教育から生まれませんが、自分の過去をいらない服のように脱いでそばに置いておくことはできませんね。けれども、哲学者はなるべく先入観を置いておく努力をします。宗教を考え

る時にも、宗教的欲求、私たちの中にある宗教への憧れを考える時にも哲学の立場からだと、既成宗教の内容をなるべく置いておきたいのです。私も今日は、キリスト教の立場から考えると、仏教の立場から考えると、あるいは他の宗教の立場から考えるのではなくて、ただ一人の人間として、理性（頭）と経験、すべての人間に開かれてある経験を手段にして宗教について考えてみたいと思います。

### 宗教の否定―科学の立場から

まず、宗教的欲求、私たちの心の中にある宗教への憧れは、一部の人によれば無意義であると考えられています。無意義というより真理価値がないと思われています。こうした人々によると、この宇宙には神様もいなければ仏様もいません。宗教はただ人間が恐怖から作り出したものに過ぎないと言います。私たち人間は、自分が必ずいつか死ぬことを意識しています。それに対して、他の動物は未来のこと、先のことをそれほど意識していないようです。私たちに一番近い動物とされるチンパンジーも、

哲学から見た宗教

数時間先のことしか意識してないような実験の結果があります。したがって、チンパンジーは恐らく自分の死のことをそれほどはつきり意識していないと言えるでしょう。それに対して、私たち人間は、未来のことをどこまでもある程度予想できます。これは私たちの生活にとつてとても便利な能力で、人類の進化においてきわめて重要な役割を果たしてきた訳ですが、それには必ず不安が伴います。なぜならば、自分の未来はいつか終わる。自分はいつか死ぬ。また、自分の大事にしている人たちや物はいつか全部なくなることも意識してしまうからです。その上、死ぬだけではなくて、私たちはいろいろな苦悩をします。病気にかかったり、いろんな損失を受けたりするわけですね。こうした苦悩を感じるだけではなくて、私たちはその苦悩自体を意識して、それを反省します。仏教の一部では「二重苦悩」という言葉が使われていますが、それは私たち人間が直接に感じている苦悩の他に、「ああ、辛い…終わって欲しいけど、いつまで続くだろう…」と考える時に新たな苦悩を受けることを意味しています。苦悩、不安、恐怖の重みは、いわゆる先進国に生きる現代の人たちにとっては少し分かりにくいかもしれませんが。特に、皆さんのような若い学生さんにとつてちよ

つと遠いことのように聞こえるかもしれませんが、昔の世界のことを考えてみましょう。昔の人たちの多くはとても若くして死にました。もちろん長生きする人もいましたが、平均寿命は現在と比べればとても短いものでした。時代と場所によって寿命は異なっていたのですが、例えば、日本の鎌倉時代だったと思いますけど、この前のテレビのニュースによれば、多くの遺骨を分析し当時の平均寿命を測った研究調査がありました。それによれば、鎌倉時代の平均寿命は、驚くことに、わずか二十三歳でした。それはかならずしもその当時の人々が二十三歳になったら死んだという訳ではなく、たとえば多くの赤ちゃんや、出産の時に多くの女性が死にました。しかも、伝染病が流行ったら、何万人、何十万人も死ぬこともありました。今は新型インフルエンザという伝染病が流行っていますけれども、ワクチンがあつて、薬があつて、多くの消毒方法があるから、それほどたいした問題になりません。ちょっと不安かもしれませんが、あまり怖くないのですね。いつか怖い伝染病が発生するかもしれませんが、昔の伝染病のようににはならないと思われれます。たとえば、十四世紀にヨーロッパで流行したペストで、当時のヨーロッパ人口の三分の一から三分の二までが亡く

哲学から見た宗教

なったそうです。現代の日本と比較してみれば、同じ死亡率の伝染病なら、四千万人から八千万人が死ぬということになります。

宗教とは、こうした辛い現実に対して不安を少し静めるために、自分を少し慰めるために、昔の人々によって作られた空想にすぎないと思っっている人たちがいます。自分が死んでも天国のようなところに行くだろう。あるいは、生まれ変わっていつか仏様になって解脱するだろうと宗教をもって自分を慰める訳ですね。しかも、原因が不明で、予防も治療もできない怖い伝染病、あるいは地震や火山の噴火のような天災は、すべて神々の意志による出来事とされます。なんらかの理由で神々がやっていることです。したがって、神々にお祈りすれば何とかなるだろうと思われれます。京都には祇園祭というのがありますね。元々は伝染病が終わったことをお祝いして、神様に感謝するためにできた祭りだそうです。私の生まれたふるさとも十六世紀に伝染病が流行って、終わった後でマリア様の立像が町の中心に建てられました。あるいは仏教では、不幸は前生の悪業の報いとされて、善業、良い行いを重ねていけば来生はよくなるだろうと考える訳です。宗教とはこうして人間がでっち上げたもの、ただの空

想に過ぎないと言われます。多くの科学者や哲学者は、形は違うのですが、宗教に対して根本的には同じ否定的な意見を持っています。現実の世界において、宗教には意味がない。しかも現代の世界では、宗教はどんどん要らなくなっていると彼らは思っています。なぜなら、科学技術の進歩のおかげで、昔の人たちが悩まされた多くの不幸や惨事が昔ほど怖くなくなったからです。伝染病は不安だが、どこかに良い薬があるだろう。地震が発生するけど、耐震建築などで多くの人が助かるし、いつか地震が予測できるようになることも期待できる。私たちは必ず死ぬけれど、今の人たちは平均としてほしい八十歳くらいまで生きる。だから自分も人生のことを随分味わってから、少し人生に疲れちゃってから、遠い未来のいつかに死ぬだろう。だから宗教はいらぬのだ。言うまでもなく、私はこうした否定的な宗教の見方に反対です。そうでなければ、今日ここで宗教の話をするはずがなかったですね。何で反対なのかというと、もちろん自分自身が宗教に関心があるから反対なのですが、一方いくつかの客観的な理由も挙げられると思います。

## 哲学から見た宗教

### 宗教の肯定―宗教的経験

まず、宗教を否定する人たちは、宗教が二十世紀のうちにどんどん消滅していくことを予想していました。しかし、そんなことはありませんでした。二十一世紀に入っても宗教はまだまだ元気です。宗教の形は変わったかもしれませんが、今のキリスト教は三百年前のキリスト教ではなくて、今の仏教も千年前の仏教ではない訳ですね。新しい世界に適應して生まれ変わった宗教ですけれども、相変わらず宗教は存在しています。悪い意味で変わったこともあります。原理主義、過激派。一番有名なのはイスラム教の過激派ですが、それだけではありません。キリスト教にも過激派があります。特に、アメリカのキリスト教の中で過激派が強いようです。しかし、良い意味でも変わったこともあります。例えば、昔は私のようなイタリア人だったら、宗教に関して二つの選択肢しかなかったと思います。カトリックになるか無神論者になるか。つまり、宗教に関心を持つ人なら、自然にカトリックになったのに対して、

宗教に関心を持たない、神様が存在しないとと思う人なら、無神論者になった訳です。今はイタリア人として生まれても、仏教徒になることもできるし、ヒンズー教徒になるイタリア人もいるし、ユダヤ教徒になるイタリア人、イスラム教徒になるイタリア人もいます。カトリックは今もイタリアで一番普及している宗教ですが、カトリックでなくてもいろいろな宗教に入ることができます。日本人もキリスト教徒になることができます。非常に珍しいですが、イスラム教徒になった日本人もいます。あるいは、いろんな宗教から自分に合うアイデア、自分に便利な内容を選び出して、自分自身の宗教が作れます。乱暴な言い方かもしれませんが、十人十色と言われるように、自分に合った宗教を作ることでも可能ですね。要するに、宗教を否定する人たちの予測は実現しなかったに違いありません。

宗教の否定的な見方に納得できないもう一つの大事な理由に注目したいと思います。宗教にはもちろん逃亡、逃げる側面もあります。辛い現実から逃げたい。理想の世界へ逃げたい。天国、極楽浄土、空想とも言われる世界へ逃げたい訳です。宗教にはこうした消極的な側面もあります。しかし、ポジティブな側面、積極的な側面があ

哲学から見た宗教

ることも否定できません。なぜかというところ、それは経験的に証明されているからです。いろいろな人たちは宗教的な体験をして、その体験によって宗教の世界を実感しました。一番分かりやすい例を言えば、修業している人たちは宗教的な心境、宗教的な実在を実感している訳です。いくら空想の世界と言っても、彼らは実際にそれを経験しているのです。これに関して、一つの面白い本を皆さんにご紹介したいと思います。興味があれば、ぜひ読んでいただきたいと思えます。日本語のタイトルは『僧侶と哲学者―チベット仏教を巡る対話―』です。内容は、元々ノーベル賞受賞者のもとで生物学の博士号を取得したフランス人、M・リカール (Mathieu Ricard) とその父親との対話です。リカールはチベット仏教の僧侶になりました。父親はフランスやアメリカでかなり偉い哲学者、J・F・ルヴェル (Jean-François Revel) という人で（息子と父の名前は違いますが、父の名前はいわゆるペンネームです）、無神論者で、理性主義者でした。つまり、人間は理性、科学だけに頼るべきで、宗教は空想にすぎないと考える人です。しかし、科学者として育った彼の息子は仏教徒になって、インドの北部、ダライ・ラマが住んでおられるところに移住し、三〇年近くチベット僧侶

として生活をしてきました。ある日、父親は息子の元を訪れ、彼と宗教のことについて長く話し合いました。そしてその会話が本になりました。その本は話題になってたぐさんの言葉に翻訳されました。英語、イタリア語、日本語……。普段無神論者と宗教家のように、正反対の立場にいる人々の討論は激しい口論になりがちですが、この本の面白いところは、二人は正反対の立場からでもオープンに、寛容的に対話していることです。親子なのですから。互いの考え方を尊敬して、相手の言うことをちゃんと受け入れて対話していくのです。その中で無神論者である父が主張するのは、宗教が空想かもしれないということ。仏様、釈尊やシッダータと呼ばれた人間が存在していたと認めても、その人が「涅槃」という境地に立って、悟りを開いたことは事実かどうかだれにも分かりません。それを信じる人は多いですが、その事実を裏付ける証拠はどこにもない訳ですね。それに対して自然科学は、だれにでも開かれている経験を対象にした観察や実験を通して、現実のありのままの姿を確実に知る学問です。息子は迷わず父の主張に反論します。自然科学には粒子という概念があります。私たちが見たり触ったりしている物質はきわめて小さい波のような粒子、陽子や電子

哲学から見た宗教

から成り立っている」と科学者たちは言いますね。どなたか粒子を見たことはありませんか。触ったことはありませんか。その音を聞いたことはありませんか。ないでしょうね。それなのに、どうして私たちは皆、粒子という不思議なものが存在しているのを信じているのでしょうか。科学者が言うから？ 科学者がウソをついていれば？ ま、科学者はいろいろな科学的な説を立てて、実験を行い、粒子というものの存在を証明する訳ですね。自分も物理学を勉強して、たくさんの数学を学んで―それは辛いことでしょうね―実験すれば、「なるほど、この実験の結果は粒子の存在を裏つけるのだ」ということが自分で実感できます。ところが、元生物学者の僧侶はこう言います。修業は科学と同じだ。いろいろな修業者は長年修業していろいろな心境に至って、いろいろな悟りの段階を開いた。自分も僧侶になって先輩の指導を受けて同じような修業を一所懸命すれば、どんどん先輩の言う心境に立つようになったと彼は言います。だから宗教にも実験的な側面があるのです。宗教的な経験にも真理価値、真実性があります。ただの空想では決してありません。この意味では、根本的には科学と変わりません。私もまさにそう思います。いろいろな人たち、毎日お祈りする信者であれ、仏

様にお線香を捧げる仏教徒であれ、こうした人たちの心の中には一種の真実が現れると思います。彼らの経験は積極的で、ポジティブなものなのです。だから、宗教的欲求には、最終的に意味がない、真理価値がないという主張は信じがたいと思います。私はどうも信じられません。

そうすると、宗教的要求にはどんなポジティブな意味があるでしょうか。これについてはそれぞれの既成宗教がいろいろな答えを出してきたと思いますが、先ほど言ったように、既成宗教を置いておいて、できるだけ「先入観」のない立場から考えてみれば何が言えるでしょうか。

自分の考えてきたことを話したいと言いましたが、それは必ずしも私の独自の発想ではありません。私は立派な学者ではないので、オリジナルな思想を作り出せる訳ではありません。ただし、話したいことは自分の頭で考えたことです。これは大事なことだと思います。本で読むアイデアでも、自分の頭で考えなければなりません。アイデアは自分のものにする限り、自分のものになります。自分のものにしなければなかなか深く理解できないと思います。だから皆さんも勉強される時に学んだことをなる

哲学から見た宗教

べく自分のものにしてようと努めてください。読んだ内容に賛成できないような時も、まず自分のものにしてみた上で、賛成できなければ否定してください。いろいろな人が私の思っていることと似たようなことを言いました。私は哲学を勉強して、あるいは宗教のことを読んで、いろいろな文章に自分の考えたことに似た発想を見つけて、その影響を受けました。だから時間が許す限り、自分のアイデアを述べながら、似たような哲学的や宗教的な発想にも言及したいと思っています。

「私」というもの

我々は何者であるのか。私たちはこの宇宙の一部です。実在の一部です。この宇宙の中で生きています。どんな意味でこの宇宙の中で生きているかという点、例えば、ペンは筆箱の中にあるような意味ではありません。筆箱を開けて、ペンを取り出せば、ここに筆箱があつてここにペンがあります。全く別個のものですね。でも宇宙からは出ることができません。私たちが宇宙の外で生きることはできません。「私」

というものは宇宙の一部として、宇宙の発展の過程の中で出てきた訳ですから。宇宙から生まれて、その一部になっている訳ですね。これは物理的に見ても言えることです。現代の宇宙論によれば宇宙はビッグバンという出来事から始まって、そこからエネルギーと物質がいろいろな形で発展して、次第に原子、分子が形成されて、そこから天体や銀河などが生まれました。そして、環境が揃ったら、細胞という複雑なものが現れてきて、多くの細胞が集まって多細胞という生物が形成されて、進化の中で生物がどんどん複雑化してきました。ようやく人間というものが現れたと言われますね。言い換えれば、私たちの中の物質は宇宙から来た物質です。星の爆発によって私たちの身体を構成する原子が作られたと言われます。私たちはいわば宇宙の生命の一部です。心臓は体の中にあって、体の生命の一部です。取り出すことはできませんけど、取り出したら心臓は働かなくなります。心臓の機能はもう果たさなくなります。私たちはこうした意味で宇宙の一部ですが、私は、もっと深くて、もっと興味深い意味において私たちは宇宙の一部だと思います。私たちは自分のことを問うています。自己の深いところを問題にして考えています。私たちは宇宙の一部として自分のこと

哲学から見た宗教

を反省しています。同時に宇宙のことも考えています。この宇宙はどこから来たのか。何から成り立っているか。いろいろな問いをかけて宇宙のことを理解したがっているのです。私たち人間は宇宙論を作ったりする訳です。これはつまり、宇宙の一部が自分を見ながら宇宙全体を見ているということなのです。これは私たち人間の特徴です。私たちは意識していると言われますが、それは宇宙が自分のことを意識しているということになります。この宇宙は自分のことを見て、自分のことを問いかけています。人間において、人間をもって自分のことを見て、自分のことを問いかけています。

もちろん、人間とは地球という一つ惑星に進化の過程によって現れて、意識と知能を備えた生物です。ところが、この宇宙には無数の惑星があるようなので（一九九五年以降二〇〇以上の太陽系外の惑星が発見されたそうです）、その中で地球のような惑星もあるだろうと思われまます。生命が生まれた地球のような惑星もあって、その一部には生命体が進化して、ようやく意識のある人間のような高知能の生き物が生まれただろうと現代の科学者は推測しています。こうした生命体も自分のことを意識しな

がら、宇宙のことを意識して問いかけているでしょう。宇宙の発展の中で自然に多くの高知能生物が現れて、宇宙は無数の生き物の意識において自分を見ていることも十分にあり得ると思います。したがって、私から見れば、宇宙が人間において自分のことを見て、自分のことを問いかけていることは、深い意味を持っています。その意味は何でしょうか。解釈によっていろいろに理解できると思いますし、私どもはなかなかよく分かりません。正直に言うと、私が動かせない真実を握っている訳ではないのです。動かせない真実を握っていれば、人生は少しつまらなくなると思いますし。ただし、この宇宙は無意味ではないことは確かだと思います。

### 意識と物質

もちろん、反対と言う人もいます。唯物論者と呼ばれる人々によれば、この世には物質しか、物事の物質的な側面しか存在していません。物質は機械的な法則によって無意識的に動かされて、物質には意味なんかないと彼らは信じています。しかし、そ

哲学から見た宗教

れはあり得ないと私は思います。まず、意識というものは物質に還元できません。つまり、物質とその法則だけで意識という現象が理解できないのです。意識は、物質から成り立っている頭脳とは何らかの関係があるにちがいません。頭脳を研究することによってある程度意識のことも理解できると思いますが、「意識Ⅱ（イコール）頭脳」ではないと思います。たとえ生きている人間の頭脳を細かく観察することができたとしても、外から観察している学者には生きている本人の意識している内容、心の中の内容が見えてこない訳です。意識には従来の自然科学によって説明できない側面があつて、そこには宇宙と意識の深い意味があると思います。つまり意識は宇宙の根本的な側面で、そこに宇宙の意味があると私は思うのです。

私たちは意識をもって、宇宙の一部として、宇宙のことを見ています。こうした不思議な事柄を少しでも分かりやすくするように、一つのイメージを使ってみたいと思います。よく使われていたイメージ、メタファーだと思えますが、私が一番分かりやすい形でそのイメージを見つけたのは、L・N・トルストイ（Lev Nikolajevich Tolstoj）という有名な一九世紀のロシア人の作家が書いた『戦争と平和』という優れた

小説を読んだ時でした。名前くらいお聞きになったことが皆さんあると思います。『戦争と平和』の中で、とても苦しい時に主人公の心にあるイメージが夢のように思いう浮かんで、それによって自分の人生の意味を直感的に把握します。世界は一つの水の玉、水のボールのようなもので、その玉の深いところに次々に水滴が形成されて表面が上がってきます。そしていつか水滴がはじけて、水滴の中にあつた水が再び玉の中に沈みます。沈んだ水は新しい水滴を形成して、もう一度表面に現れてきます。そして、これはトルストイの文章には文字通り書いてないのですが、現れる水滴が互いに反射して、互いに映し合います。一つの水滴には、他の水滴の反射が映ります。私は、そのように、つまりそうした水滴のように、私たちは宇宙の一部として生まれ、同じ宇宙の一部である周りの物事と宇宙全体を反射して写しながら生きているのだと思います。

これは考えてみれば、小さいこと、つまらないことではありません。不思議で、大変深い意味を持っていることだと思えます。しかし、抽象的というか、私たちの日常生活から少し遠いように見えるかもしれません。その不思議さはどうやって実感でき

哲学から見た宗教

るのか考えてみましょう。人間はとても小さい存在です。物理的に考えても、人間は  
 とても狭い空間の中に含まれているものですね。地球のサイズと比べればものすごく  
 小さいですね。宇宙から見た地球の中には「私」という小さいものがまったく見えま  
 せん。人間の作った物も何も見えません。万里の長城さえ見えません。月から万里の  
 長城が見えるという、都市伝説のような話がありますけど、それはウソです。さら  
 に、太陽系全体を遠くから眺めることができれば、地球さえ見えてこないでしょう。  
 銀河を眺めたら、その中にある太陽系も全然見えなくなるでしょう。何兆もの銀河が  
 存在しているこの宇宙を考えてみましょう。この巨大な宇宙から見れば、私たちはど  
 れくらい微小な存在でしょうか。宇宙全体の中で、私たちは全然見えないものなので  
 すね。考えられないほど小さいですから。しかも今は宇宙論の専門家は、多元的宇宙  
 （英語 Multiverse）という説を唱えています。少し分かりにくいかもしれませんが、  
 この宇宙は唯一の宇宙ではなくて、他の宇宙も存在しているという説です。宇宙を一  
 つの球体、ボールに例えてみましょう。私たちの観察できるものは、星、銀河など、  
 すべてこのボールの中にあつて、私たちが行ける場所は全部このボールの中にありま

す。大ざっぱに言えば、物質も放射線もこのボールの外に出ることはできないし、外からこのボールの中に入ることもできません。でも、このボールの外にたくさん違う宇宙のボールが存在しています。このように、私たちが生きている宇宙、何兆もの銀河から成り立っているこの宇宙はただ一つの宇宙で、その外にたくさん宇宙が存在している可能性があります。考えてみれば、無限の宇宙は存在しているかもしれない。実は物理的に無限かもしれません。この無限の宇宙から成り立っている実在と比べれば、私たちはどれくらい小さいものでしょうか。少し調べてみたので、皆さんと一緒に計算して考えてみたいと思います。私たちの宇宙のサイズはだいたい十乗二九センチメートルだそうです。十乗二九というのは、一つの「1」という数字の後に二九個のゼロが並んでいるという数です。考えられないほど大きい数ですね。私の身長はほぼ一八〇センチメートル弱です。宇宙のサイズと比べればものすごく小さく見えますね。だけど、まだまだその比例が理解できます。割合が考えられないほどのものですけど、何とか把握できます。「十乗二九分の一八〇」という割合ですね。ところが、「無限分の一八〇」という割合は？「 $180 \div \infty$ 」という割合は数学

哲学から見た宗教

的に無意義だという意見もありますが、意義があれば、それは「ゼロ」なのです。多元宇宙の説が正しかったら、私はきわめてゼロに近い、限りなく無に近い存在にすぎないことになるのです。しかし、私はこうした無限のことを意識しています。私の心の中にはこうした無限の宇宙のイメージが浮かんでいます。無限の宇宙は、私という、とんでもなく小さなものの中に映っています。水滴において水の玉が映っているように、私の頭の中には宇宙のアイデア、一切や無限のアイデアがあります。

これに近いアイデアを表現した有名なメタファーを紹介したいと思います。B・パスカル（Blaise Pascal）と云う、一七世紀の著名なフランス人の数学者、物理学者、思想家が作ったメタファーです。パスカルとはすごい人でしたよ。一六歳の時にすでに数学者として有名になって、一七歳の時に史上最初の機械計算機、現代のコンピュータの祖先になった機械計算機を作った人です。今もコンピュータの世界に「パスカル」と呼ばれるプログラミング言語があるのもそのためなのです。また、パスカルは物理学者として圧力の研究の基礎を立てたので、今も圧力の単位として「パスカル」という呼び方が使われています。テレビの天気予報を見れば、時々「ヘクトパス

カル」(百パスカル)という用語が聞かれますね。ところでこのパスカルは、二三歳の時に宗教のことに目覚めました。彼はキリスト教徒として生まれていたにしても、元々それほど宗教のことに関心を持っていませんでしたが、二三歳の時に科学から宗教の方へどんどん向かいました。そして宗教について、「パンセ』(フランス語 Pensées、「思考」、「思想)」という有名な本を書きました。本人がまとめた書物ではなく、彼の書き残した文章を死後集めた書物です。キリスト教の立場ですけれども、とても面白い本なので、興味があればぜひ読んでみてください。短い文章の集まりなので、全部読まなくて、少しずつ読んでみてもいいですから、割と読みやすいと思います。この『パンセ』の中にとっても有名な文章があります。「人間はひと茎の葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である。」私たちはとても弱いものです。小さくて弱い存在です。地震があれば私たちは死ぬかもしれません。強い風が吹いたら私たちは死ぬかもしれません。微細な細菌さえ私たちを簡単に殺せます。だから私たちは簡単に折れる葦のように弱いとパスカルは言っている訳です。ところが、パスカルが強調しているのは、私たちは「考える葦」だということ

哲学から見た宗教

です。私たちは私たちを圧倒して殺せるものを理解できません。ある意味では、私たちは自分を殺せる大自然を心の中に含んでいます。私たちが包む世界を心の中に包んでいます。それだけではなくて、私たちの中には無限が含まれています。私たちは無限の宇宙まで考えることができる訳ですから。私たちの心の中には無限があります。これは実は、よく宗教で言われることだと思います。形は違うのですが、根本的に同じ発想が多くの宗教にあります。たとえば、人間の心の中に神様がいると一神教（キリスト教やイスラム教）を信じている人々はよく言います。イスラム教のある文章の中に（「ハディース」という文章ですが）神様自身が言っていることが書いてあります。「宇宙全体は私を含まない。」神様は宇宙より大きくて、偉大なるものなので、無限な宇宙でも神様を含めないということです。「しかし、信者の心は私を含んでいる。」神様のことを考えて、神様を感じている私たちの心は神様を含んでいるので、無限のものが私たちの心の中に含まれています。

私は実在の一部、宇宙の一部です。実在の一部、宇宙の一部は、一人の人間になりました。私という個人になりました。今私がここにおいて、皆さんを見ています。この

部屋を見ています。つまり、実在を見ています。皆さんは夜に星空をじっと眺めたことがあるだろうと思います。星空を見ている時に、宇宙を見ている訳です。これはつまり、私たちは実在を意識しているということに他ならないのです。けれども、同時に私たちはその実在から生まれてきました。宇宙は私の目の前にあるだけではなく、宇宙の一部が私というものになったため、私の中にも宇宙があります。外に向いている方向だけではなく、中に向いている方向にも無限の実在が存在しています。先ほどの水の玉の例で言えば、一個の水滴の中に全体の水滴が映っているだけではありません。その水滴は、他の水滴と同じように、玉の水から成り立っています。つまり、玉自体の一部がその水滴になっている訳です。私はただ実在の一つの有限で微細な一部にすぎませんが、実在全体、一切に繋がっています。外からでも、中からでも、宇宙全体に繋がっています。これは私の考えていること、私の感じていることです。だとすれば、私は個人として亡くなっても、私の中にある無限なものはなくならないでしょう。また水の玉のメタファーで言えば、水滴ははじけてもその水はなくなりません。その水はもう一度もともと出てきた所に戻っていく訳です。玉のまん中に戻って

## 哲学から見た宗教

いく訳です。私が死んでも私の中に恐らく死なない永遠のものはあるでしょう。

私たちは自分自身を見ている宇宙そのものです。私たちは宇宙の一部として宇宙全体を見ているので、皆それぞれ「小宇宙」です。つまり、宇宙の一部の中に全体が映っているという、いわば宇宙のミニチュアなのです。人間は小宇宙であることに宗教的欲求の意味があると思います。宗教的実在とはウソではなくて、宗教家の主張するように、私たちの中に永遠に繋がるものが事実としてあることが改めて確認できます。私たち人間が、自分の拠り所、自分がそこから生まれてきて、死んだら入るところ、しかもそこにおいて生きているところについて問いかけることには宇宙的な意味があると思います。ただ私たちの頭の中の空想だけではなくて、実在に根拠のある事柄なのです。私たちにおいて、宇宙自体が自分のことを理解しようとしています。宇宙は自分のことが悟りたい、自覚したいような気もします。私たちにおいて自覚するためにこの宇宙が存在しているような気もします。大げさな言葉でデタラメだと思われるかもしれませんが、私は人間と宇宙の関係を考える時に、こうしたことを強く感じます。私だけではなく、偉い人たちも似たようなことを言ってきました。私がこう

した偉い人たちの文章を読んで、自分のアイデアを形成してきた訳です。

### 宗教的欲求

せっかくですから、先ほども言及した西田幾多郎という日本の哲学者の文章を引用したいと思います。まず彼の処女作、初めて出版した有名な本、一九一一年の『善の研究』からです。少し難しい著作ですけど、割と短くて、哲学のことが少し分かったら読めるでしょう。日本の思想の典型的な著作なので、興味があればぜひ読んでみてください。その中の「宗教的要求」という章から引用したいと思います。「宗教的要求は自己に対する要求である。自己の生命についての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に合一してこれに由りて永遠の真生命を得んと浴するの要求である」。つまり、宗教的要求とは、私たちが有限なもの、相対的なもので、それとして消滅せざるを得ないものだとしりながら、自分の中で無限のもの、絶対のものとして合一して、それによって永遠の生命を得ようとする

哲学から見た宗教

る要求なのです。同じ西田幾多郎が晩年に書いた文章、「場所的論理と宗教的世界観」という論文からも引用したいと思います。長年の深い思想の結果として書かれた論文なので、かなり難しく、哲学、特に西田哲学をたくさん勉強しないとなかなか理解しがたい文章ですが、少し読んでみたいと思います。「我々の自己の一人が、自己自身の世界を限定する唯一的個として、絶対的の一人を表現すると共に、逆に絶対的の自己表現として、一人の自己射影点となる」。難しいですが、説明してみれば、私たちは人間として生きることによって自分自身の世界を形成します。ユニークな個人として自分の世界、自分の小さい宇宙を作ります。それによって實在全体（絶対的の一人）を表現します。實在全体を意識し、行動によって世界を変えることで、無限の實在を表現して作っていきます。私たちは、自分を映して表現する實在全体の「自己射影点」です。つまり、私たちにおいては無限の宇宙自体が自分を表現するため、私たちは宇宙全体の自己表現の焦点なのです。「世界が自覚する時、我々の自己が自覚する。我々の自己が自覚する時、世界が自覚する。我々の自覚的自己の一人は、世界の背景的一中心である。」私たちが自覚する時に宇宙が自覚して、實在全体が自覚して

います。逆に言えば、実在が自覚していることは、人間のような実在の一部が自覚していることになるのです。

ここには私の考える宗教的欲求の深い意味があると思います。私たちが宇宙の一部として宇宙から生まれて、自分の心の中に宇宙を映します。これはつまり、宇宙本体が私たちにおいて自覚するということなのです。ここにこそ、私たちの人生の意味、目的があるかもしれません。人生の目的は、その目的を問いかけて求めること自体にあると、先ほども引用したトルストイは考えていましたが、まさにそのとおりだと思います。そして、私たちが死ぬ時に個人としてなくなるかもしれませんが、私たちが形成して、私たちの中に自分を意識している無限のものはありません。私たちの心の中に永遠のものがあって、そのものは消滅しません。こうした永遠のものを悟ることによって、私たちは自分の死を克服できるかもしれません。

## 哲学から見た宗教

### 私の中の永遠

時間がほとんどなくなってきましたが、最後に今まで申し上げたことの意味についても少し考えてみたいと思います。まず、私たちは実在の自覚で、小宇宙であるという主張は、西洋のいわゆる「人間中心主義」、「ヒューマニズム」に他ならないと西洋の思想史をご存知の方は思われるかもしれません。人間中心主義とは、人間は宇宙の一番偉いものだという考え方なのです。こうした考え方はもともと古代西洋の思想にも少しありましたが、特にキリスト教と、キリスト教の祖先であるユダヤ教にあります。聖書の「創世記」という、神様による宇宙の創造を語る文章にはこうした神様の言葉が書いてあります。「私たちの像に、私たちと似た様に人を造る。」(一・二六)つまり、神様が人間を自分の影像、いわば自分のレプリカとして作った訳です。さらに、キリスト教では神様が人間になったことが信じられています。イエスキリストは人間になった神様なのです。こうした人間中心主義は西洋の思想に強い影響

を与えて、「ヒューマニズム」としてイタリアのルネサンスにおいてはつきりと表面に出てきました。今も西洋人の世界観に影響を与え続けていると言えます。西洋の科学技術が世界に普及した結果、全世界の人々の考え方にも影響を与えていると考えられます。たとえば、現代の生物学者が遺伝子組み換えなどによって生命、人体の根本的な作り方を勝手に変えようとしていることも、人間中心主義を背景にしていると思われれます。人間はこの世の最も偉いものなので、世界の主人、世界の持ち主のようにみなされているからです。

今日申し上げたことは人間中心主義と同じでしょうか。一方、そう考えてもある意味では間違いないと思います。この地球では、宇宙のことを理解しているのは、実在を意識しているのは人間だけです。他の惑星、あえて言えば他の宇宙では高い知能と意識を備えた異なる生き物が人間と同じように宇宙を理解するかもしれませんが、少なくともこの太陽系では人間しかいませんね。ですから、この意味では人間は他の生き物より偉いとも言えないことはありません。ところが、人間が偉い理由は、人間が宇宙万物を意識しているからです。自分のことだけを意識しているからではなく

哲学から見た宗教

て、自分も含めて、一切の实在を意識しているからなのです。言い換えれば、宇宙は人間のためにあるのではなく、逆に人間が宇宙のためにあるとも考えられます。实在を意識することによって、人間は实在につかさざるとも言えます。ハイデッガーという二〇世紀のヨーロッパの哲学者の言葉をパラフレーズ（釈義）して言えば、人間は实在の持ち主ではなく、实在の僕（下部）です。したがって、今日私が述べてきたことは必ずしも人間中心主義と同じではありません。実は、私たち人間は他の生き物より偉いという考え方は西洋の人間中心主義だけではなく、仏教にもあるのです。なぜならば、仏様になり得るのが人間でしかないとされるからです。そのために人間として生まれることは大変な幸運とされます。「ジャータカ」（閻陀迦、閻多伽）という仏教の物語によると、釈尊もいろいろな動物として生まれ変わってから、何度も人間として生まれ変わった結果、ようやく仏様になり得たそうです。

時間が許す限り、もう一つのことについて、とても簡単に触れたいと思います。今日申し上げたことは、既成宗教の立場から見ればどうなるでしょうか。キリスト教的な考え方でしょうか。あるいは、仏教的な考え方でしょうか。実は、すでに述べたよ

うに、私たちの中に永遠のものがある、無限のものがあるという発想は、多くの宗教にあると思います。先ほど引用したイスラム教の文章にあるような発想、つまり私たちの中に神様がいる、神様が含まれているという発想はキリスト教にもよく見られます。聖書によると人間は神様の影像、レプリカとして作られたことをすでに申し上げましたが、それはつまり、私たちの心の中に永遠の神様の影像があるということなのです。A・シレジウス(Angelus Silesius)とこう一七世紀ドイツのカトリックの神秘主義者がこう言いました。「私は神様のように大きい。なぜならば、神様は私のように小さいから。」神様は私のように小さいということは、神様は私の心の中にいるということに他ならないのです。

私は仏教の専門家ではないので、ここで仏教について話すのがちよつと恥ずかしいのですが、仏教にも似たような発想があると思います。それは「如来蔵」という発想です。学生さんも仏教の授業で勉強されたことがあると思いますが、大ざっぱに言えば、私たちの中に仏様が宿っている、仏様がいるということなのです。私たちの中にはいわば仏様の種が潜んでいて、悟ることはその種を咲かせることです。仏様の像はよ

哲学から見た宗教

く花開いた蓮華の上にあるのもこれにちなんだことだと思えます。私たちの中に如来蔵があるという発想は、私たちの中に神様のイメージがあるというキリスト教の発想に近いと思えます。既成宗教の教義を置いておく哲学の立場から見れば、こうした発想は人間の中に永遠のもの、实在全体の影像、反射があるということに他ならないと思えます。言うまでもなく、仏教ではその永遠のものを表すために私の使った言葉はあまり使われていません。皆さんもご存知のとおり、仏教では悟りの境地で開かれる、この世の最終的な有様を表現するためには「实在」、「宇宙」のような表現よりも、「無」や「空」のような表現が使われているのです。西田幾多郎も「無の自覚的限定」という言葉を使っていました。ここに西洋人の考え方と東洋人の考え方の大きな違いがあると思う人もいます。しかし、よく考えてみれば、今日の話に関してはその違いがたいした問題ではなくて、結局のところただの言葉遣いの違いでしかないと思います。仏教で言われる「無」や「空」というのも、所謂ニヒリズムの虚無、つまり「何もない、空っぽ」という消極的な無ではなくて、積極的でポジティブな意味を持つている無なのです。西田幾多郎も「創造的無」という表現を使っていた訳で

す。

大ざっぱな話で申し訳ございませんが、時間がなくなつたので。このへんで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

〔参考文献〕

西田幾多郎、「善の研究」、岩波書店、一九七九年

西田幾多郎、「場所的論理と宗教的世界観」、「西田幾多郎哲学論集」、第三卷、岩波書店、一九八九年

J・F・ルヴェル・M・リカール、「僧侶と哲学者―チベット仏教を巡る対話―」、菊地昌実・高砂伸邦・高橋百代訳、新評論、一九九八年

L・N・トルストイ、「戦争と平和」、工藤精一郎訳、新潮社、一九七二年

——二〇〇九年一月二七日——